

瓢箪供養ひょうたんくよう

野村胡堂

一

「あ、八じゃねえか。朝から手前てまえを捜していたぜ」

路地あしおとの跫音あしおとを聞くと、銭形平次は、家の中からこう声をかけました。

「へエ、八五郎には違えねえが、どうしてあつしと解ったんで？」

仮住居の門口に立ったガラッ八の八五郎は、あわてて弥造を抜くと、胡散うさんそうに鼻のあたりを、ブルンと撫で廻すのでした。

「橋がかりは長げえやな、バツタリバツタリ呂律ろれつの廻らねえような足取りで歩くのは、江戸中搜したって、八五郎の外にはねえ」
平次は春の陽溜りにとぐろを巻きながら、相変らず気楽なことを言って居るのです。

「へッ、呆あきれたものだ」

「俺の方でも呆あきれているよ。その跫音あしおとの聞えるのを、小半日待っていたんだ」

「用事でえのは、何ですかい、親分」

「それが少し変っているんだ。手前てまえ、昨日瓢箪供養ひょうたんくように行ったつくな」

「行つて見ましたよ、筆供養や針供養はチョクチョクあるが、瓢箪供養てえのは江戸開府以来だ。あれを見て置かねえと、話の種にならねえ」

「どんな事をやったんだ、一と通り話してくれ、——少し変なこ

とがあるんだが、瓢箪供養の因縁いんねんが解らなきや、見当がつかねえ」
平次は煙管のぼを伸して、腹這いになったまま一服つけました。

紫の烟けむりが、春の光の中にゆらゆらと流れると、どこかの飼うぐいすい鶯の聲が、びっくりするほど近々と聞えます。長閑のどかな二月の昼下がり、――

「因縁へちまも糸瓜もありやしません、――寺島に住んで居る物持の佐兵衛、瓢々斎とか何とかいって、雑俳ざっばいの一つも捻ひねる親爺で、この男が、長い間の大酒で身体をいけなくし、フツツリ不動様に酒を断ったについては、今まで物好奇ものずきで集めた瓢箪が三十六、大きいのも小さいのも、良いのも悪いのもあるが、持って居るとツイ酒を入れて見たくなるし、人様に差上げても、酒を入れるより外に用事のない品だから、思い切って向島土手に埋めて供養塔を建てようという趣向しゅこうで――」

「なるほど少し変って居るな」

「三十六の瓢箪を自分の手で穴に埋め、その上に『瓢箪塚ひょうたんづか』と彫ほった石を押立て、坊主が三人にお客が五十人ばかり、引導を渡して有難いお経を読んで貰って、それから平石ひらいしへ行つて一と騒ぎの上、桜餅を土産に帰って来ただけのことで、何の変哲もありやしません」

「ところが変哲なことになったんだ、――その瓢々斎が昨夜死んだとしたら、どんなもんだ」

「えッ」

ガラッ八もさすがに膽きもをつぶしました。

早耳が何より自慢の自分が、少し間抜けにされたのは宜いとしても、昨日あんなに元気で、百までも生きるような事を言ってい

た瓢々斎が、その晩死のうとは、全く夢にも思わなかったのです。「命が惜しくて酒を止めた人間が、その晩死ぬなんぞ、少し皮肉過ぎやしませんか、親分」

「届出は頓死だが、——あの辺は石原の利助兄哥の縄張内だ。昼頃変な小僧が手紙を持って来たんだそうで、お品さんが持って来て見せてくれたよ」

「手紙にはどんな事が書いてありました、親分？」

「恐ろしく下手な字で、——瓢々斎が死んだのは、病氣や過ちぢやねえ、人に殺されたに違いないから、お上の手で調べてくれ——とこういう文句だ」

「へエ」

「一応石原の子分をやることにして、お品さんは帰ったが、——フト思い出したのは、二三日前手前が話していた瓢箪供養のことだ。どうかしたら八五郎のことだから、物好きに行行って見たかも知れないと、手前の来るのを心待ちに待っていたのさ」

「物好きも満更無駄じゃなかったわけで」

「ハッハッ、ハッハッ、その気でせいぜい間抜けなものは見て歩くがいい」

平次はカラカラと笑います。順風耳ガラッ八の、倦むことを知らぬ獵奇癖が、飛んだところで、飛んだ役に立つことは、随分これまでも無い例ではなかったのです。

「おや？ お客様ですよ、親分」

ガラッ八は聴き耳を立てました。

「お品さんらしいな、——こいつは面白くなって来たかも知れないよ。瓢箪供養は少し変り過ぎていると思ったが、矢張り変なこ

とになった様子だ、お品さんが自分で来るようじゃ真物だ」

二

平次とガラッ八が、寺島まで飛んで行ったのは、その日も暮れ近いころ、石原の利助の子分達がお係り同心とやって来て、検屍もちょうど済んだばかりというところでした。

瓢々斎というのは、元横山町で手広く金物問屋をして居た家の主人で、金にも娑婆しゃばっ気にも不足のない男でしたが、たった一人の倅佐太郎が、素姓のよくない女と一緒にになり、それがきっかけで勝負事に手を出し、果ては金看板きんかんばんのやくざ者になり下がってからは、いさぎよく久離切きゅうりきって勘当し、自分も商売が嫌になったものか、横山町の店は人に譲ゆずって、その身上を、地所と家作おびただと夥しい現金に代え、寺島村りょううの寮に引込んで、雑俳三昧まいの気楽な老後を送って居たのでした。

一緒に住んでいるのは横山町の店の支配をしていた甥おいの駒三郎という五十二三の男と、中年者の下女お滝、その亭主で下男をしている元助の三人だけ、外に瓢々斎の友達で、下手な雑俳たしなを嗜む露の家正吉という中老人、これは野幫間のだいこのような男ですが、筆蹟ひっせきが良いので瓢々斎に調法がられ、方々の献句けんくの代筆などをして、毎日のように入り浸びたって居りました。

変死人を病死ていの体にした駒三郎と元助夫婦は、さんざんの小言を食った上、責任者の駒三郎は番所に引かれ、家の方は友達甲斐がひに露つゆの家正吉が、元助夫婦を指図して、どうやらこうやら、仏様の恰好をつけて居りました。

「大変だね、宗匠そうしよう」

「あ、銭形の親分、——瓢々斎も到頭死んでしまいましたよ」

正吉は平次の顔を見ると、いそいそ飛んで来て、訊かないことまでも説明してくれます。その言葉によると、今朝庭の池の中に、瓢々斎が上半身浸ひたって居るのを、下女のお滝が見付け、亭主の元助を呼んで一緒に引揚げると、頸くびには麻縄あさなわが固く結付けてあり、縊くびり殺して池へ投ほうり込んだことはたった一と目で判ったということでした。

平次とガラッ八は、死体を見せて貰い、庭も一と廻りしましたが、さて何の変ったところありません。

「元助を呼んで貰いたい」

「へエ」

正吉は飛んで行って、人相のあまりよくない、無精髯ぶしょうひげの五十男をつれて来ました。

「お前は元助だね」

「そうだがすよ」

元助は平次の前へヌツと突っ立ったまま、およそ無愛想な様子を見せます。

「何時いつからこの家うちに居るんだ」

「奉公してから二十六年になるがね」

平次もそう聞くと、一寸予想外ちよつとでした。こんな人相の悪い男を二十六年も使っているのは、よくよくの事情があるか、でなければこの男は見かけに寄らぬ善人で、主人に腹の底から信頼されたせいでしょう。

「お神さんは？」

「あれは二十年にもなるかな、——五六年前に主人が仲人^{なこうど}で、縁遠い同士一緒になっただよ」

そんな事をツケツケと言つてのける元助です。

「主人が夜中庭へ出たのを知らなかったのかい」

「俺の寝て居るのは家の向う端だ、知るわけはねえ」

「駒三郎は？」

「これも知るめえよ、滅多^{めった}に家に居ることのない人間だから」

「そいつはどう言うわけだ」

「番頭さんは、まだ若いだ、ヘッヘッ」

元助はそう言つて口を緘^{つぐ}みます。若いと言われる駒三郎さえも五十の上でしょう。

「主人はちよいちよい夜分に外へ出るのかい」

「それは判らねえ、が、雨戸を開ける音はチヨクチヨク聞くだ」

「何の用事で外へ出るんだ」

「ヘッ、そいつは知らねえ」

そう言いながら、元助の怪奇^{かいき}な顔がニタリと笑うのです。

「知らないでは済まないぜ、——お前の心当りだけでも言ってみるがいい」

平次は大事な鍵^キを見付けると、その微妙な感触を追つて、ジワと追及^{ついきゅう}しました。

「金でなきや女の事だんべいよ」

「？」

元助の言葉はそのまま謎でした。が、追及したところで、これ以上解るところへは行きそうもありません。

「勘当された^{せがれ}俵があつた筈だが、あれは何処に居るんだ」

平次は話題を転じました。

「あれだよ、——あの家に居るだ。旦那が横山町の店に居なさる頃、この寺島の寮の隣の空家と、三百両の金をつけて久離切っただ。金は一年経たないうちに費ってしまったが、家は辺鄙で買手がいないから、今でも自分で住んで居るだ」

「——」

如何にもありそうな事でした。平次はうなずいて次を促します。「旦那が店を仕舞ってこの寮へ引込むと、勘当した伴の面見たくないと言って、境へ頑固な生垣を結わせ、三年越し口もきいたことのない仲だ。こんな反の合わない父子を、おら見たこともねえ」

元助はそんな事まで言うのです。瓢々斎の寮の立派さに似ず、勘当した伴佐太郎の家というのは、僅か二た間ほどの小さいもので、仕切りの金目垣は、いやが上にもよく茂り、野良犬の通路とも見えるかなりの穴が一つある外には、木戸一つない因業なものでした。

三

番頭の駒三郎は、係り同心漆平馬の手で、嚴重に調べられました。が、昨夜は一と晩、内々小梅に囲っている、お為という女のところに、宵から朝まで居たことが判って、これは無事に帰されました。

隣に住んでいる伴の佐太郎も、親父との仲があんまり悪かったので、一応は調べられたのですが、これは講中のことで品川へ

行つて一と晩留守、家には暮から重病で寝て居る女房のお松と、六つになる孫の春吉のたった二人だけ、淋しく留守をしていたと判つて、これも疑いの圈外へそれてしまします。

残るのは奉公人の元助とお滝の夫婦者だけ、これも二十年間無事に奉公した人間ですから、人相が悪いとか、貯えが多過ぎるかでは主殺しの疑いをかけるわけに行きません。

すると、下手人は外から入ったことになるわけですが、家の外から庭へ入るのは内木戸が嚴重で容易でなかったのと、わざわざ庭へ呼出して、頸に縄を付けて、池に投り込まれるまで、瓢々斎が音も立てなかったということは、どう考えても少しテニヲハが合わなくなります。

その晩、いざ神田へ引揚げようと言う時、

「八、こいつは少し変じゃないか」

平次はいきなりこんな事を言うのです。

「何が、変で？ 親分」

「瓢々斎は金があつて、曲りなりにも雑俳でもやる風流人だ。どう間違つても自害する氣遣いはないと思つたのが、——少し怪しくなつて来たよ」

「すると、あれが自殺だというんですかい、親分」

これはガラッ八の方が余つ程おどろきます。人間は、自分の頸を絞めて死んでしまつてから、池へ上半身をつ突つ込むなんて器用なことが出来る筈ありません。

「一応人手に掛つて死んだように見えるが、外から入つて殺した様子はなく、一番怪しい駒三郎は留守だったんだから、疑えば元助夫婦だけだ、——その元助夫婦が主人の死んだのも知らず、自

分の罪を隠す何の細工もせず、朝までぐっすり寝ていたのは変じゃないか」

「成程ね」

「疑いを駒三郎か元助に持って行くように出来ているが、俺はどうも、大変な細工があるんじゃないかと思う」

「――」

ガラッ八は親分の考えを測りかねて、長い頤を天に冲させます。
「麻縄の新しいのは、水へ漬けるとギョツと縮むだろう、――瓢々斎が自分の頸を絞めて、いきなり池へ逆様に飛込んだとしたらどうなると思う」

「へエ――」

「麻縄はギョツと縮んで喉へ食い込むから、水ぶくれになった死骸は、人に絞め殺されて水に投げ込まれたようになるだろうと思うが――」

「驚いたね、親分」

「その証拠は、池のあたりは柔かい土だが、踏み荒らした跡は一つもない」

「――」

「明日は一つ池を漑さらってみよう」

平次の考えは不思議なコースを辿たどって、先から先へと発展している様子です。

「親分の言い草じゃねえが、金があつて風流人だった瓢々斎が、何が気に入らなくて死ぬ気なんかになったでしょう」

ガラッ八は新しい問題を出しました。

「そいつは俺にも解らねえが、酒の好きなものが、何かわけが

あつて酒を止すと、急に死にたくなるんじゃないか——」

「そんな事があつた日にや、酒も滅多に断たれねえ」

「瓢箪供養までやって、いよいよ酒を止したという晩、フラフラと死ぬ氣になったのは、そんな事じゃないかな」

これも併し平次の想像に過ぎません。

ガラッ八の八五郎は、それを後に聞いて、お勝手から、瓢々斎の部屋を捜して居りますが、

「親分、恐れ入った、——さすがは見通しだ」

何やらワメキ散らしながらやって来ます。

「何を騒ぐんだ、八？」

「瓢々斎の居間の押入に、飲みかけの貧乏徳利が一本、猪口が一つ隠してありますぜ」

「どれどれ」

手に取って嗅いで見ると、猪口にはまだ酒の匂いが残って、一升入りの徳利は半分ほど空になっております。

「こいつを知らなかったのかい」

ガラッ八は貧乏徳利を指して、うろうろしている下女のお滝に訊ねました。

「一向知りませんよ。旦那はお酒の吟味がやかましくて、剣菱を樽で取って飲んで居ましたから、酒屋の徳利なんか家へ入るわけはありません」

醜い四十女のお滝は、恐る恐る灯の中へ顔を突出します。

「その樽はどうしたんだ」と平次。

「昨日瓢箪供養に持出して、残った酒を皆な塚へかけてしまった



様子です」

それを聞くとガラッ八は舌舐めずりをしました。勿体なくてたまらない様子です。

「それで、この世の思い出の晩酌の分をそっと隠して置いたのだから」

「成程ね」

「八、手前は、酒の鑑定は自慢だったな」

「それ程でもねえが」

「その徳利に残ったのを嘗めてみてくれ。剣菱か地酒か、それが判りゃいい」

「それ位のことなら判りますよ」

ガラッ八は徳利の酒を一口、上戸らしく、喉をゴクリと鳴らしました。

「どうだ、八」

「これは良い、——地酒なもんですか、劍菱ですよ、こんなのは滅多にこちとらの口へは入らない」

ガラッ八はもっと欲しそうに、ピタピタと舌を鳴らします。

「やはり死ぬ気だったんだね。本当に酒を止す気で瓢箪供養したのなら、たった一升だけ貧乏徳利に劍菱を残しておく筈はない、——夜中に急に飲みたくなれば、お滝を酒屋まで一と走りさせて、まずい酒でも何でも買わせるだろう」

平次の推理は、事件を次第に怪奇な——が犯罪性のないものにして行きます。

「自殺と決ったら長居は無用だ。引揚げましょうか、親分」

「待ってくれ、もう一つ、この手紙は誰が書いたか、元助と宗匠に鑑定して貰おう」
めきき

平次は——瓢々斎は人に殺されたに違いない——と、石原の利助のところへ投込んだ、無名の手紙を取出して、露の家正吉と元助に見せました。

「見たこともありませんよ、親分」

能筆のうひつで聞えた正吉は、蚯蚓みみずののたくったようなのを見て苦笑します。

「元助は？」

「ヘッ、おらには判りませんや」

元助はニヤリニヤリとしております。自分の無筆むひつを恥じての照れ隠しでしょう。

「上手な筆蹟を、わざと下手へたに見せたんじゃないね」

平次は正吉に訊たずねました。

「そんな事はありませんよ。下手は上手の真似が出来ないように、上手は下手の真似は出来ないものです。字の呼吸こきゅうや字配りを知って居ると、左手で書いても、口で書いても、何となくうまさの出るものです」

正吉の言うのは尤もつともでした。

「死んだ瓢々斎の字は？」

「あんまり上手じゃありませんが、こんな下手じゃありません。それに筆や墨がひどく悪いし、たったこれだけの文句に間違った字や、仮名違いが三四カ所あるでしょう。雑俳ざっばいでもやる人間は、そんな事はしません」

これで、瓢々斎佐兵衛が、自殺した後で変な手紙が御用聞のところへ届くようにしたのではないかという、尤もらしい疑いも成立しないことになりました。

四

翌る日、池いけ渌くらいに行った平次とガラッ八は、あまりの事に仰天しました。瓢々斎のこの遺した寺島の寮は、店仕舞と煤すす掃はきと壊こわし屋を一ぺんに喉のどけたほどの荒らしようです。

門も、玄関も家の中も、——柱を抜き、床を剝し、天井も壁も、物の蔭という蔭は、手のつけないところはあります。

「これは何うしたことだ」

平次はさすがに気色けしきばみました。

「主人の遺した借金が、少しばかりではございません。その始末をするにいたしましても、主人は何の遺書もなく、有った筈の金

も、何処に隠してあるか、一両と纏まとまったものも見付かりません。いたし方がないので、支配人の私が、先代と懇意こんいな正吉さんと相談の上、奉公人の元助夫婦立会いの上、家中を捜して見ました」番頭の駒三郎は、悪びれた色もなく、こんな事を言つて居るのです。

「身内、親類の者に相談してはどうだ」

平次は唾つばでも吐はきかけたい心持でした。余りにも見え透いた弁解わけです。

「お気の毒なことに、御主人には身寄も親類もございません」

「倅の佐太郎は隣に住んでいるではないか」

「あれは身持が悪いから、末始終親の頸に縄をつけ兼ねない奴だと仰しやつて、七年前に久離切つて人別にんべつまで抜きました。隣に住んでいても口を利いたこともございません。主人が亡くなったからと言って、あの方かたを引入れては、支配人の私が相済みません」駒三郎の言い分は、一応尤もですが、平次には、その冷たさがなんとしても氣に入らなかつたのです。

「そう言ったものかな、大店の支配人の物の考えようというものは。——が、これから名主なぬしか五人組の立会の上でなきや、勝手な真似は止した方がいいぜ、つまらねえ疑いを受けることになるから」

「へエ——」

駒三郎も仕様事なしに承服しました。

「で、金があつたのかい」

「横山町のお店を畳んだ時、五千両は残した筈ですが、家の中を見ると、たった一両もございません」

「皮肉だな」

ガラッ八はヒヨイと口を出して平次に睨まりました。

「それほど念入りに捜したのに、どうして池の水を乾して見なかったんだ」

「親分さんが昨夜、——池は明日漂^{さら}って見ると仰^{さう}しやったものすから」

駒三郎にもそれ位の遠慮はあったのでしよう。

「一体、当座の払いというのはいくらあるんだ」

「これだけでございます」

駒三郎の出した書附を見ると、愚^ぐにもつかぬ諸^{しよ}払^{ばらい}がざっと十二三両、それも出入りの人足の手間や、酒屋米屋の払など勘定してあるのです。

「これが万両分限の瓢々斎の残した借金かい」

「へエ——」

「地所や家作もうんとあるということだ。こんな無法なことをしなくたって、諸^{しよ}払^{ばらい}の恰好はつくだろう。庭石一つ、掛物一本売っても十二三両の始末はつくじゃないか」

「へエ——」

駒三郎は正に一言もありません。下男の元助は、醜^{みにく}い顔をひん曲^まげて「それ見た事か」と言いたい様子です。

そんな事をしているうちに、ガラッ八は小さい水門を抜いて、池の水を干^ほしました。深さ三四尺、たった五六坪ほどの池は見る見る綺麗に水を抜かれて、よく手の届いた底を見せます。

「何にもない」

ガラッ八は少し物足りない様子でした。

「なきやなくていい、——どれ」

平次は駒三郎を追いやつて、池を念入りに覗いて見ました。蓬よもぎも菖蒲しょうぶも芽を吹かない池は、岸の草まで、冬枯ふゆがれのままで、何の変哲もなく底をさらして居るのです。

「おや？」

平次は岸の泥の中から変なものを抜き出しました。

「子供の玩具おもちゃじゃありませんか、親分」

「笛だよ」

泥を拭くと、赤い段だら横縞よこしまを書いた玩具の竹笛で、まだ少しも傷んでいないところを見ると、昨今池の水際みづぎわの泥に突き差したものでしょう。

「誰のでしょう」

ガラッ八は眉まゆをひそめました。

「こいつは飛んだ獲物かも知れない。黙っているんだよ」

「へエ」

平次は八五郎に口止めをして、竹笛をそつと袂に入れました。

「さア解らねえ、何もかも判じ物だ」

ガラッ八は忌々しそうに大舌打をしました。

「俺には段々解つて来るような気がするよ」

平次は何か他のことを考えている様子です。

「第一に解らねえのは、死ぬ覚悟をした人間が、何だつて瓢箪供養なんて、手数のかかる事をしたんだろう」

「何十年の間大事にしてきた、三十六の瓢箪を、自分と一緒にこの世から暇乞いしまがいをさせたかったのさ。酒好きの考えそうな事よ」

「へエ——そんなものかなア、俺なんか酒は嫌いじゃねえが、まだ瓢箪と心中する気になったことはねえ」

「枡ますの角すみからばかり飲むからだよ」

「違ちがえねえ」

八五郎は掌てのひらで額を叩きました。正に一言もない態です。

「そこで一つ、駒三郎か元助に、これだけの事を訊いて来てくれ、

——瓢々斎ひょうたんは瓢箪ひょうたんを供養するのに、無瑕むきずのまま埋めたか、それとも後で掘り出して使わないように、一々割るか切るかしたか」

「へエ——」

「それから、まだある。——瓢箪を土手下まで持って行くのに、人手を借りたか借りないか」

「それだけですか、親分」

「まア、そんな事でいい」

ガラッ八は飛んで行きました。

五

翌る日の朝。

「大變ッ、親分」

鉄砲玉のように飛んで来たのがガラッ八です。

「わッ、虫の毒だぜ、手前てめえと附き合あって居ると、落着いて飯も食くっちゃ居られねえ」

平次は文句を言いながらも、大したイヤな顔もせず、この早耳てんさいの天才を迎えました。

「落着いて飯なんか食くって居られねえ、大變なんだ、親分」

「いつもの大變とは少し大變が違ちがうようだね、どうしたんだい、一体」

「駒三郎が殺されましたぜ、親分」

「何？」

「場所は向島の土手下、瓢箪塚を掘り荒した前だ」

「本当か、それは、八」

「本当も嘘もねえ、大変な騒ぎだ」

「よしッ」

銭形平次は箆はしを投ほうり出すと、羽織を引っかけて、十手を懷にねじ込みざま、ガラッ八と一緒に飛び出します。

「まア」

よき女房のお静は、呆氣あっけに取られてその後姿、朝の春光の中に消え行く二人を見送りました。御用のことというと、まるで火の付いた鼠花火ねずみはなびのように飛出す、夫の平次が少し怨めうらしかったのでしよう。

一方平次とガラッ八は、向島まで駆けて行く道々、先刻の会話を続けました。

「手前、瓢箪のことを誰に訊いたんだ」

割って埋めたか、無瑕むきずのまま埋めたかという——あの一件を平次は指すのでしよう。

「駒三郎に訊きましたよ。すると駒三郎は——主人は誰かに掘出して使われると嫌だからと言って、わざわざ職人を呼んで、三十六の瓢箪ひょうたんを一々横真二つに挽ひき割らせ、それを自分で合せて、紐で縛って埋めましたよ——と言いながら、何か変な顔をして居ましたよ」

「それから」

「瓢箪を運んだ話も、——一つ一つ自分で運はこばなくたって宜いわ

けですが、あの通りの気性で、何でも自分でしなきゃ気に入らないで——そんな事を言つたのも駒三郎です」

ガラッ八は昨日きのうの報告をもう一度くり返しました。

「しまったよ、八。駒三郎はそれを訊きかれたんで、死ぬような事になったんだ」

平次は思いも寄らぬ事を言います。

「それは、どういうわけで？ 親分」

「解るじゃないか、三十六の瓢箪に五千両の小判を隠したと気が付いたんだ」

「えッ」

「瓢箪の口からは小判は入らない。瓢箪に隠すなら、横に割るより外に工夫はない。俺はそれを訊きたかつたんだ。それで瓢々斎が死ぬ前の日に瓢箪供養をしたわけもよく解る」

「そいつは本当ですか、親分」

ガラッ八は、平次の袖を押えました。五千両の小判というと、大商人の大身代です。それを大小三十六の瓢箪に隠すというのは、何ということでしょう。

「駒三郎は曲者くせものだ、五千両の金をさがしあぐんでいるところへ、その事を聞いてハッと気が付いた。多分夜になるのを待ち兼ねて行つたんだらう。寮から土手どての瓢箪塚は三十間とは離れちゃいない」

「――」

「塚を掘って瓢箪を取出したところを、出し抜いた仲間の悪者に見付かり、その場を去らず殺されたんだらう」

「成程ね、まるで見ていたようだ」

そんな事を言っているうちに、足の早い二人、渡船わたしふねを飛び出して、寺島へ着いて居りました。

土手下の瓢箪塚のあたりは、真っ黒な人ばかり、利助の子分が二三人、声を洩からしてそれを追っ払っております。

「銭形の親分」

利助の子分達も、かかり合いで来て居る露の家正吉も、ホッとした様子です。

人垣を分けて飛込んだ平次も、自分の予想と寸分すんぶん違わぬ現場の様子に、物をも言わずに立ち竦すくみました。それは実に恐ろしい暗合です。

瓢箪塚は無慙むざんに掘り荒らされて、中から取出した瓢箪は、一つ一つ合せた紐を切って割られ砕くだかれ、その瓢箪の殻からと泥の中に、脳天を胡桃くるみのように叩き割られた駒三郎は、紅に染んで倒れていたのです。

「親分、こいつは誰の仕業でしょう？」

露の家正吉は恐る恐る顔を出しました。

「恐ろしい力のある野郎だ」

平次はそう言って、駒三郎の脳天を叩き割った、泥と血潮だらけな鍬くわを指しました。

「後ろへ忍び寄って、自分の使って居る鍬で打たれるのを、知らずに居たでしょうか」

ガラッ八はさすがに急所に気が付きます。

「夜更けなら知らずにいる筈はない、多分仲間だろう」

「仲間？」

「だが、お気の毒なことに小判は瓢箪の中になかった」

「どうしてそんな事が判るんです、親分」

「割った瓢箪はたった五つだ、あと三十一は紐ひもで縛ひもったままになつて居る、持上げるか振つて見るかして、皆んな空からっぽなんで諦めて行つたんだろう」

「人間一人を無駄に殺したわけで」

「駒三郎も殺されるような事をして居たんだろう、それにしてもイヤな事だな」

平次はひどく不機嫌です。

その時、小梅の方から飛んで来た女が一人。

「駒三郎さんが殺されたんですって、そんな事が本当にあるんでしょうか」

取乱した風で瓢箪塚へ来ると、駒三郎の死体を一目、ワッと取りすぎりました。

「あれは誰だい」と平次。

「お為ですよ」

ガラッ八は囁ささやきました。

お為はあたり構かまぬ大愁嘆だいしゅうたんで、

「お前さん、何て事だろうね、いつも命を狙っている者があるつて口癖に言つてたけれど、まさか、こんなになろうとはねえ、——きつと敵は討つてやるから、一と言、たった一と言つておくれ、矢張り、あの佐太郎かい、——自分が勘当されたのをお前のせいにして居たそうだから、——ね、駒さん、ね」

惨憺さんたんたる死体を揺ぶり揺ぶりの大口説おおくぜつです。

お為の嘆きを聞捨てて、平次とガラッ八は寮の裏へ大廻りに、佐太郎の家へ行きました。

「あれは、親分？」

眼の早いガラッ八が指したのは、朝陽を明々と受けて、昨夜から干し忘れたらしい半纏はんてんが一枚、裏の物干竿ざおに引っかけてあったのです。

近寄って見ると、胸のあたりへなすり付けられた血潮と泥。

「――」

平次は黙って眼を見張りました。

「ね、親分、これだけで証拠は沢山でしょう、佐太郎の奴をしよっ引いて行きましょうか」

ガラッ八は囁きます。

「証拠はこれ一つでたくさんだ、佐太郎は下手人じゃないよ」
平次の言葉は予想外でした。

「親分」

「不足ふそくらしい顔をするなよ、――俺もお為の言うのを聞いて、てつきり下手人は佐太郎と思い込んだが、ここへ来て見ると気が変わった」

「へエ――」

「何処の世界に、血の附いた半纏はんてんを、これを見て下さいと言わぬばかりに、天道様てんとうさまの下にさらして置く下手人があるんだ」

「――」

「それに、あれはゆうべ取込み忘れた洗濯物で、まだ洗って手を

通していないよ。あんなに袖なんか突っ張って居るじゃないか、洗濯物を胸に当てて、人を殺す奴もないだろう」

「――」

「まだある、下手人の着物なら、血が飛沫しぶいている筈だ、あれだけひどく殴ったんだもの、――ところがあれは血を拭ふいたんだぜ」
平次の言葉は星を指すようです。

「成程な、恐れ入った、さすがは銭形の親分」

「おだてちゃいけない」

二人は踵くびすを返そうとしました。

「銭形の親分」

不意に後ろから呼ぶ者があります。振り返って見ると、三十二三の小意気な男が、雨戸の蔭から、丁寧に挨拶しているのです。

「お前は？」（編注）

「佐太郎でございます、――今のお話は他所よそながら聞いてしまいました。有難うございます。親分さん方が、そんなお心持とは知らずに、不貞腐ふてくされて知ってることも申上げず、親父が死んでも顔を出さずに居りました」

佐太郎は陽の中へ顔を出すと、頬を濡らして泣いていたのです。
「お前は大した悪人でもないようだ。何だって勘当されたり、奉公人にまで遠慮をしなきゃならないんだ」

平次は濡れ縁に腰を掛けました。

「勘当されたのは、これと一緒にになったのが切っかけで――」

佐太郎は後ろをふり返ります。枕屏風の蔭には長患ながわづらいの女房

お松が、形ばかりの夜の物を着て青白い顔をのぞかせて居るので
す。

「それはどうも腑^ふに落ちないよ、——お神さんは商売人あがりというわけでもなかったそうだが」

「あんなに親父が腹を立てるとは、私も知りません。ツイ一緒になつてしまうと、火のついたような怒りようで、この家と三百両の金を貰つて七年前に久離切られました。それから吞む、打つで」

「父親が、お前を傍へ置きたくない事でもあつたんじゃないのかな」

「そんな事があつたかも知れません」

「何か変つたことに気が付かなかったのか」

「そう言えば駒三郎は甥^{おい}でも従弟^{いとこ}でも何でもないのに、世間へは親父の甥と触れ込んで、店の事を一切取仕切つて居りました。――

それから、元助も、奉公人のくせに、恐ろしく贅沢^{ぜいたく}で、親父をせびる事ばかり考えて居たようでございます」

佐太郎の話には、何か深い仔細^{しさい}がありそうですが、平次の勘^{かん}でもこればかりは解りません。

「お前は何処で育つたんだ」

「遠州ですよ、——里にやられて十二三まで育つた頃、江戸から迎いが来て引取られたのが、今の親父の横山町の店です」

「駒三郎か元助を、子供の時見た覚えはないのかな」

「少しも覚えがありません、江戸へ来て始めて見た顔です。尤も、露の家正吉という男には見覚えがあります。あれは左の耳に瘤^{こぶ}があつた筈ですが、いつの間にならなくなっていました。二十七八年も前に、浜松で見た顔です」

「そいつは何かの役に立つだろう」

併し、佐太郎からさぐれる話はそれっ切りでした。立上がつて帰ろうとすると、チョコチョコと飛んで出たのは、六つばかりの男の子、小柄で色白で、男人形のように可愛らしいのが、大した人見知りもせずに、平次とガラッ八の前に立ってニコニコして居ります。

「これは、お前さんとこの総領かい」

「春吉と言いますよ、まだ六つになったばかりで」

「こんな可愛い孫があるのに、瓢々斎の祖父さんも、ろくに顔も見ずに死んだんだろう、気の毒な」

思わずそんな事を言う平次、佐太郎はさすがに顔を背けました。

屏風の蔭では鼻を吸る音が――

「おや？」

ガラッ八はつと足下を見ました。気のきいた懐中煙草入が一つそこへ落ちて居たのです。

「こいつはお前のかい」

平次はそれを拾って、佐太郎に見せました。

「飛んでもない、そんな洒落たものを持てる身分じゃございません」

「こいつは飛んだ良い物が手に入ったよ」

平次はそれを懷中に入れて、立去りました。

七

その足で平次は、遠州浜松の城主七万石松平豊後守の上屋敷に飛んで行き、御留守居の役人から何やら聞き出しました。

「今日の仕事は少し大きいが、合点か、八」

門を出ると、いつになくいきり立って居ります。

「どんな事をやらかしゃいいんで？」

「まア来てみるがいい」

二人はもう一度向島へ、——もう日は暮れかけて居ります。

ひょうひょうさい

瓢々斎の遺した寮へ行くと、平次はいきなり下男の元助をつかまえたのです。

「御用ッ」

「あッ、何をするんだ、縛られる覚えはねえ」

「黙れッ、今から二十八年前、浜松の城下で、御用金三千両盗んだ大泥棒の片割れ、手前は般若はんにゃの元吉だろう」

「あッ」

「八、そいつを縛ってしまえッ」

「応ッ」

乱闘は一瞬しゅんにして終わりました。元助の元吉は八五郎に組伏せられて、キリキリ縛り上げられます。

「もう一人居るんだ。そいつは番屋へ預けて、一緒に来い」

平次とガラッ八は、引返して中なかの郷ごうへ飛びました。

露の家正吉の家へ裏表から入ると、

「あ、これは銭形の親分、丁度お茶が入ったところだ、まず一服」
などと言うのを、

「御用だぞ、遠州の正太、神妙にせい」

平次の十手はピシリとその肩を打ったのです。

「あッ、俺はそんなものじゃない、この露の家正吉は、縛られるような悪事を働いたことはない」

「黙らないか。二十八年前三千両の御用金を盗んだ四人組の一人、その左の耳の瘤こぶを取った疵痕きずあとが何より証拠、浜松様の御屋敷に聞き合せての上だ、間違いはない」

「嘘だ嘘だ」

「その上五千両の金を捜さがして、駒三郎まで殺した筈だ、神妙にせい」

「違う違う、あれは元助の仕業だ」

「いや元助じゃない、佐太郎に罪を着せるつもりで細工をしたのは、手前の悪知恵だ」

「その証拠は――」

「この懷中煙草入が物を言うぞ、印伝いんでんの吠かますに銀煙管、こいつは下男の持つ品じゃねえ」

「えッ、こうなれば頭巾を脱いでやろう。いかにも俺は遠州の正太、安岡っ引に縛られるような三下じゃねえ」

「何をッ」

ここでも乱闘は瞬時しゅんじに片附きます。二十八年前の巨盜は、口ほどもなく、平次やガラッ八の敵ではなかったのです。

二人を縛って番屋に並べ、証拠を揃えてピシピシ平次は締め上げました。

こうなると、もう嘘うそも隠しありません。

今から二十八年前の旧悪、瓢々斎佐兵衛と駒三郎と正吉と元助の四人が、浜松の御用金三千両を盗んで高飛し、四人で均等きんとうに分配して、それぞれ正業に就く筈でしたが、本当に正業に就いたのは、後の瓢々斎こと佐兵衛たった一人で、あと三人は半歳経たないうちに費つかい果し、二三年後には横山町で大町人になって居た佐

兵衛のところへ転げ込んで、散々嫌がらせの限りを尽しながら食
い下がつっていたのでした。

商才しょうさいのある駒三郎は甥おいと名乗って番頭になり、人相のよくない
元助は下男に、文筆ぶんぴつのある正吉は我儘者で友達ということになり
ましたが、二十六年間三人の搾しぼった額は容易なものではありません
ん。

佐兵衛は商売上では申分なく成功しましたが、この旧悪きゅうあくが何時
露頭ろけんするかも知れないのを恐れて、伴佐太郎に難癖つけて勘当し、
寺島の寮の隣に住わせましたが、三人の悪人に見張られて表向の
交通もなり難く、散々搾しぼられ脅おどかされた挙句あげく、到頭自殺をして、
この旧悪の責苦から逃れる工夫をしたのでした。

自殺を他殺と見せたのは、駒三郎や正吉や元助に対する嫌がら
せで、瓢箪供養は五千両の金の隠し場所をカムフラージュする
洒落しゃれでしょうが、それにしても、真物の五千両は、一体どこに隠
してあるでしょう。

二人の悪人を、下っ引に護らせて奉行所に送らせた後、平次は
ガラッ八と二人、小判捜しで荒され抜いた寮の縁側に腰を掛け、
湿しめっぽいような春の月に照らされて、何時までも何時までも考え
て居りました。

「八、考えてみろ、五千両という大金だ、この寮の何処かに隠し
てあるに違いない。それを捜さなきゃ、この仕事は仕上がったと
は言えねえよ」

「五千両は大きいね、親分、五千両大福餅を買ったらどんな事にな
るだろう」

八五郎は相変らずこんな事を言うのです。

「馬鹿野郎、大福餅を五千両食う奴があるものか」

「一朱の家賃を先払にしたら、何年氣樂に住めるだろう」

「呆れた野郎だ、手前の言うことは、一々子供染^{あき}みているよ、――

子供と言や、いつかこの池で見付けた玩具の笛だが、こいつがどうも一と役買つて居るような氣がしてならねえ」

「そいつをピーと吹くと、親分も子供附き合いが出来るといふものさ」

「その氣で一つ吹いて見るか」

平次はそう言いながら、竹笛を口に当てて、二つ、三つ、ピー、ピーと吹いて見ました。

「こいつは夜っぴて吹いたって、浮れる氣遣いはない、が、飛んだ愛嬌があつていいね」

二人は声を合せて笑いました。何処からともなく、朧^{おぼろ}を染めるような梅の匂い――。

「おや？」

八五郎は早くも氣が付いて池の後ろを指しました。頑丈^{がんじょう}な金目垣、その一箇所^{くぐ}に野良犬の潜る通路が一つあることは、平次も早くから目をつけておりましたが、その穴をガサガサ潜つて、小さいものがヒョイと此方の庭へ飛込んで来たのです。

「おや、春吉じゃないか」

佐太郎の一粒種^{ひとつぶだね}、死んだ瓢々斎の孫に当る、あの可愛らしい男^{かわい}の児が、何の惧れ氣もなく、縁側に並んでかけて居る二人の前へ歩いて来るではありませんか。

「小判をおくれよ」

おどろき呆れる平次の前へ、春吉は小さい手を出しました。振

り仰いだ顔の可愛らしさ。

平次はしばらく呆氣に取られて居ましたが、やがて、何やら呑込んだ様子で、懷中から小粒つぶを二つ三つ取出して、春吉の掌ての上に載せてやりました。悲しいことに、錢形平次の懷中には小粒などが入っているのは、一年に幾度もないことだったのです。

「また来るよ」

春吉はギラギラする小粒を、しばらくは怪訝けげんそうに眺めて居りましたが、それでも小判の仲間と思ったか、スタスタと金目垣に引返すと、元の穴をくぐって、自分の家の方へ行きます。

「八、あれを何処へ持って行くか、見張っているんだよ」

「心得た」

ささや

囁く二人。子供はそんな事に構わず、氣輕に歩いて、お勝手の前の井戸の側へ行くと、用心のためにしてある、嚴重な蓋ふたの隙間から、ポトリと中へ投ほうり込んだのです。

「しめたッ、これで五千両の行方が判った」

平次とガラッ八は、表から飛出すと、大廻りに廻って佐太郎の家へ飛込みました。

×

×

平次はその晩下谷の松平豊後守上屋敷へもう一度行つて留守居の役人に逢い、二十八年前に盗まれた、御用金の三千両を佐兵衛せがれの伴の名で返しました。その上、正太（正吉）、元吉（元助）二人の悪人を召捕ったことを報告して、死んだ佐兵衛の遺族いぞくには、係り合いなしという事にして貰いました。

「こんな清々せいせいしたことはないな、八」

もう夜半過ぎの街を、神田の自分の家へ、二人は軽い心持で急

ぎました。

「井戸の中から小判が出たときは驚いたぜ」
とガラッ八。

「それより俺は、竹笛を吹いて子供の出て来た時の方が驚いたよ、——瓢々斎はあの笛を吹いて、人知れず孫に逢い、悪人に狙われている五千両の金を隠させて、死ぬ支度したくをしたんだね」

平次は何となくホロリとした心持です。

「でも、あれで佐太郎も助かったわけだね、親分。女房の養生も出来るだろうし、二千両ありや——」

「そんな事は言わない方がいい。皆な忘れて仕舞うことさ」

「ところで、たった一つ判らねえ事があるんだが、——お品さんが持って来た手紙は、ありや誰が書いたんでしよう」

「判ってるじゃないか、佐太郎さ。隣の家で親父おやじが死んだと聞いて、何か、あんな手紙を書きたくなったのさ、おや、もう家だよ」

「姐御が待つて居るぜ」

そのとき女房のお静は、寝もやらず二人の蹙音あしおとの近づくのを待つていたのでした。

(編注)

底本では佐太郎の年齢を二十二三としていますが、後段の文脈と嶋中文庫版に基づいて三十二三に改めました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>